

(実践報告)

異文化への認識と理解

Intercultural Awareness and Understanding

吉澤（渡邊）小百合

Sayuri Yoshizawa-Watanabe

(星薬科大学 教育学研究室)

1. はじめに

異文化と聞いて、まず外国の人や文化を思い浮かべる人はかなり多いのではないだろうか。2020年の東京オリンピックに向けて更なるグローバル化が叫ばれる中、海外から来ている人たちに遭遇する機会が増している。日本人と触れ合い、日本の生活や文化を体験したい外国人が気軽に泊まれる手段としてだけでなく、地方に観光客を呼ぶ手段としても有用だと言われて認められることとなった民泊（一般の個人宅に対価を支払って宿泊すること）が増えたことに加え、外国人労働者の受け入れも拡大してきている。独立行政法人日本学生支援機構の外国人留学生在籍状況調査によると、1983年にはわずか1万人だった留学生が、2003年には10万人を超え、2018年には前年比12.0%増の298,980人だという。法務省によると、平成30年6月時点での在留外国人数は、263万7251人で、前年末からの半年で9万390人増えて過去最高となり、現在も増え続けていることもあり、異文化と聞けば外国の人や文化を思い浮かべるのも無理はない。実際、筆者の「異文化理解」の授業の初回では、異文化について、外国の人や文化に関することを答えた学生がほとんどであった。そこ

で、その講義を受ける中で、本来の異文化の意味について、受講生の考えや認識がどのように変わったのかを調べることを目的とする。

本稿の構成は以下のようになっている。第2章では異文化の意味と異文化理解力を持つ重要性について述べ、第3章では本学で行っている「異文化理解」の授業について簡潔に記す。第4章では講義の受講前後での受講生の異文化に対する考えや認識の変化について、最終章ではまとめを述べる。

2. 異文化とは

今秋に、日本経済新聞で経団連の会長が述べていたが、企業で働く優秀な人材に必要な能力の一つとして求められるものの中に「異文化理解力」が入っている。これは、政府が今年の6月に「経済財政運営と改革の基本方針2018」を閣議決定し、新たな在留資格である「特定技能」を創設することにより「一定の専門性を有し、即戦力となる外国人材を幅広く受け入れる仕組み」ができるようになるということ踏まえての見解であると思われるが、「語学力」や「数理的能力」とともに挙げられていたということからも、異文化を理解することが有利な就職を目指す大学生にとって重要であることが分かる。

異文化とは、自分が属する文化とは異なるものすべてである。最も身近なところで言えば、違う家庭環境で育った自分の両親、時代の流れとともに育てられ方が違った兄弟姉妹もまた異文化である。その他、異性や同級生、他府県の人、異業種の人、他民族なども異文化としての大きな枠の例に過ぎない。個々人は複文化的な存在であり、自身が帰属する複数の集団を基盤に時を過ごしている。人は、国籍や性別、年齢、教育、社会における身分や経済的階級、宗教や出身地、自らが育った家庭環境や婚姻後に新たに作られた家族と結び付いた文化など、自分の中に抱えているのである（西山ほか、2015）。それゆえに、異文化を理解するということは、自分以外の人たちの考えや意見に耳を傾け、それに同意しないまでも受け止めるということなのである。

最近では、異文化を意識しさえすれば、自国から出なくても触れる機会は溢れ

ている。海外の人々や文化と遭遇するだけでなく、広く異文化を「他者」と置き換えて考えれば、それはいくらでも見出せると言われている（高城，2017）。「異文化理解とは自分以外の人を理解する」という意味であり、「自分たちの身近にいる人を理解することが異文化理解の第一歩である」と気付く必要がある（原沢，2013）。あらゆる人々と関わりを持つことによっておこる軋轢や、それにより生じるストレスに対応できる力を身につけることが、企業からも求められる「異文化理解力」、対人能力の向上に繋がるのである。

3. 人と文化「異文化理解」の講義について

本学では、4年次の教養科目「人と文化」の必須選択科目の一つとして「異文化理解」という授業が提供されている。この授業では様々な活動が行われたが、以下にその一部を述べる。

1. 自分が常識だと思っていたことが他の人にとっては常識でなかったと気付いた経験について発表する。
2. 異文化に適応する段階について具体例を出し合う。
3. ペアやグループを作り、会話の中では自分の考えと反対のことを敢えて述べて相手の反応を見たり、意見交換をする。
4. 興味を持った異文化について調べ、スライドを使い発表を行う。

このような活動を通して、決して変えることのない自分の考えとされる固定観念に学生自ら気づき、これまでの自分の考え方を見直すよききっかけを得ている。また、視点を変える訓練をすることにより、他者の意見に耳を傾け、異文化を受け止める重要性を実感できる内容となっている。

4. 学生が考える異文化

4.1 受講開始時の認識

初回の授業で、異文化をどのようなものだと考えているのかを最初に自由に述べさせたところ、以下のような例があった。

- ・ 外国では、レストランやタクシーでチップを払うことが当たり前ということ。
- ・ 来日した外国人は、マスクを付けている日本人が多いのに驚くと聞いたこと。
- ・ 留学生と待ち合わせたところ、自分は5分前には着いていたが、相手は10分遅れでも詫げる素振りもなかったこと。
- ・ 欧米では自己主張をきちんとできないとやっていけないこと。
- ・ 映画やアニメで、日本では女性の声優が話している動物が、英語版では男性の声だったりすること。
- ・ 被災地で物資や食料の支給のときに整列している日本人が外国のテレビで取り上げられていたこと。
- ・ 日本では落とし物やなくし物をしても連絡をとれば保管してあったり交番に届けられていて返ってくることが多いが、外国ではスリが当たり前に起こったり、落とし物をしても返ってこないことがほとんどだということ。
- ・ 日本に来る外国人が薄着であること。
- ・ 旅行した国（台湾）で、駅中での飲食が禁止だったこと。
- ・ 東日本と西日本ではエスカレータで寄る側が違うこと。

このように、異文化とは外国の人との間で感じる異なる文化だと思っていた受講生が多いことが分かる。最後の一例は、「異文化って外国の人や文化に関することだけかしら？」という筆者の言葉に反応して出てきた例である。

4.2 受講終了時の認識

授業内での様々な活動を通じて、「異文化とは日本以外の人や文化、慣習だ」

という受講開始時の答えが、受講終了時には以下のように変わった。

- ・異文化は海外だけでなく、日本の中の地域差やことば(方言),家庭間のルール等も異文化にあたり、非言語的コミュニケーションも地域や人種等で受け取り方・捉え方が異なることが分かった。自分が当たり前だと思っていることが必ずしも常識とは限らないと痛感し、軽率な行動をしないように心がけ、ちゃんと物事を考えて遂行しようと思った。
- ・自分が固定観念に縛られて生きている可能性もあると思ったので、他の人の行動もきちんと受け入れるようにしなければ、と思った。
- ・他県や他国に誇れる文化や風習を大切にしつつ、新しいものを受け止める度量が必要だと感じた。
- ・国の違いだけでなく、個人が違えば異文化になってしまうことがわかった。
- ・社会人になってからも、他の環境に身を置く際は、その文化に適応するまでは何が起きても冷静に対応できるようにゆとりのある行動を心がけたと思う。
- ・異文化に触れた際は、新しい発見だと思い、自分あるいは自国と異なる点を探すことを楽しみにできたらいいと思う。
- ・視点による文化の違いの大切さを感じた。何か問題が起きたときに、それぞれの立場から見ることにより、違った側面が見えてくるので、異文化を理解することは重要だと思った。
- ・男女間や世代間の認識の違いも異文化に含まれることが分かった。家庭による文化の違い(食事中にテレビをつける・つけない,家事の分担や家庭内ヒエラルキーなど)に出会ったとき、否定せずに受け止め、良いものだと思ったなら受け入れることができるようにしていきたい。
- ・差別を無くすには、一人一人が寛容な心を持ち、「受け入れる」ということを大事にすること。まずは「知る」ことから始め、理解することができるようになればいいと思った。
- ・価値観の違いも異文化であり、合わせるのは苦痛になってしまうので、せめて理解しようとするのが大切なのかなと思った。

このように、受講前後で異文化に対する解釈が変わったことが分かり、異文

化を理解するというこの意味と重要性を学生が認識できたことは、大変意義がある。

5. おわりに

最も小規模な文化の母体である家族内でも、共通認識がある程度存在するとは言え、考え方の違いは当然にあることに加え、異性の親や兄弟姉妹とは、性別という異なる文化により、理解を得ることが難しい場合もある。幼稚園や保育園で初めて他人とともに時間を過ごす機会を得てから、小・中学校での義務教育、高校や大学等の教育機関でも自分とは異なる背景を持つ人たちと学ぶ機会を多く持つことにより、他者を認め、時には自分の考えを改め、新しいものを受け入れるように自然になることもあるが、異文化に気付かないまま社会に出てしまうこともある。

職場においては、同職種か他職種か、あるいは同業種か異業種かによっても、意思疎通の図りやすさが違うことが多々ある。今後、ますます深刻化する少子高齢化に対応するため、様々な背景を持つ人々が労働者確保のために雇用されることになることが分かっている。家庭や教育機関、職場や地域社会など、多様な場で生涯を通して継続的に接触することになる異文化だが、「自分以外はみな異文化」と考えることにより、些細な違いにも気付くことができ、本学が学生に求めるものの一つである「グローバル化に対応した国際感覚」のみならず、「医療従事者や患者と協力関係を構築する力、様々な教養を身に着けることなどにより幅広い視野を持ち、多様な思想や文化を受け入れ、他を思いやる力およびコミュニケーション能力」である協働力をも獲得できるようになるのではないだろうか。

参考文献

文部科学省「留学生受入れ概況（平成15年版）」(2003)

独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」(2018)

法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）2017年12月」(2017)

法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）2018年6月」（2018）

内閣府「経済財政運営と改革の基本方針2018～少子高齢化の克服による持続的な成長経路の実現～」(2018)

西山教行・細川英雄・大木充編「異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために」(2015)

高城玲編著「大学生のための異文化・国際理解ー差異と多様性への誘い」(2017)

原沢伊都夫「異文化理解入門」(2013)

薬学教養教育研究学域 FD ワークショップ報告書「本学が目指す薬剤師像を実現するための薬学科の教育を考える」(2018)